

遠隔授業におけるピアノ指導法に関する一考察

One consideration about the piano instruction method in the remote class

川 田 将 人

KAWADA Masato ※1

岡 泉 志のぶ

OKAIZUMI Shinobu ※2

Abstract:

In this study, we conducted a questionnaire survey of students who took the "Piano Performance Method I" course offered by the university, which incorporates this year's distance learning, and analyzed the contents. As a result, some teaching methods were effective for the students. It turned out that there was.

We have come to the conclusion that it is an effective teaching method to practice in combination with face-to-face lessons, such as incorporating music commentary in video format in piano teaching in limited classes in the future.

It can be said that this teaching method can be applied to a wide range of students at a nursery training school.

キーワード：

遠隔授業、保育者養成、ピアノ指導法、オンラインレッスン

1. はじめに

保育者養成校におけるピアノ指導の方法については、これまでの多くの先行研究がなされてきた。学生自身が練習内容を把握し、事前事後学習に取り組むための練習カルテの導入（今泉 2004）¹⁾ や、ピアノ実技における課題曲を 11 のグレードに分け、バイエル等に主軸をおきつつ、それぞれのグレード認定課題曲として、保育現場で使用するののできる作品から選択曲を設定し、実践的な楽曲も習得することで学習の充実と意欲向上を図る取り組み（多田、他 2019）²⁾ など、その多くは、ピアノ演奏という高度な専門的技術をカリキュラムに組まれた約一年半程度の期間で効率的に習得することを目的としたものである。

今年度は Covid - 19 の蔓延により、大学は休校と遠隔授業を余儀なくされ、学生を取り巻く学習環境は一変した。本学は、これまで 1 対 1 形式の対面指導で個々の経験や能力に応じたレッスンであったため、遠隔授業においても同等の質を確保する授業方法を模索して早急に実施することとなった。そこで、遠隔授業のみで対応することとなった 5 月の 4 回と 6 月（授業 5 回目）より遠隔・対面の併用が可能となったオンライン授業において、いくつかの方法による遠隔でのピアノ授業を実施した。今年度実施したいくつかの非対面形式による授業方法は、従来の対面授業と組み合わせる事が可能であり、それにより今後のピアノ指導をより効率的に行うことができるのではないかと考えた。遠隔・非対面

※1 佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科

※2 佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科

Sano Nihon University College Lecturer (part-time)

Sano Nihon University College Associate Professor

指導と対面授業の相互補完については、深見ら（2009）³⁾ や中平ら（2012）⁴⁾ の研究によって、幼児曲の指導における指導法と効果が明らかとなっている。

本学では、1年生を対象とした「ピアノ演奏法Ⅰ・Ⅱ」^{注1)} で基本的音楽知識の習得とピアノ演奏の基盤を形成することを目指しており、本稿では、今回のコロナ禍において本学が行ったピアノの授業形態と内容を分析し、その結果から、今後の対面授業のみの授業形態となった際にも、最も効率的に学生の学習・理解を促進できる方法を抽出し、新たな指導法として取り入れることを目的とする。つまり、限られたカリキュラムの中で、学生が今後の保育現場で活用・昇華することのできる音楽・演奏の基盤を獲得できる授業内容の確立を目指すものである。

Ⅱ．授業の実践内容（表1）

前述の通り1対1の対面授業において直接指導を行っていたが、授業開始後1度も学生の演奏を聴くことなく遠隔授業で対応をすることとなった。入学前教育として、アンケートによるピアノ経験の聴取と「ピアノ演奏法Ⅰ」における推奨課題曲（バイエル教則本12番～104番までから抜粋した47曲）を配布しており、初回の対面授業では、その中から自分のレベルに適正な任意の課題を選択し、練習してくるが、事前ア

ンケートによるこれまでのピアノ経験等は、実際にはブランクのある学生も多く、現在の状況を教員が直接聴取し、適切なスタート課題を改めて決定していた。各スタート課題を学生自身で可能な限り適切に決定するため、本学で取り入れているバイエル課題を5つの段階に分け、スタート課題決定の目安として掲載した。Web授業としては、学生を適切な練習に導くための、注意すべきポイントや楽曲解説を教員個別サイト^{注2)}に掲載した。また、自身の練習状況を視覚化し把握できるように、日々の練習時間や練習曲を書き込む練習チェックシートを配布し記入してもらった。しかしながら、これらの方法は双方向型の授業として成り立っていないため、「ピアノ演奏法Ⅰ」の授業3回目（5月3週目）に双方向型授業開始に向けて、各学生のネット環境、周辺機器などの把握を含めた準備、学生の学習状況把握や学生のピアノに対するメンタルケア、直接的な問題解決を目的とした特別対面授業を実施することとした。特別対面授業を実施するにあたり、学生にはWeb授業期間中の練習した課題や分からない箇所、うまく弾けない部分等を動画、または録音で記録し、特別対面授業時に提出・質問し、限られた時間内で洩れなく問題解決できるよう提示して周知した。

特別対面授業では、把握した各学生の状況

表1：実践期間と実践の流れ

実践期間（2020年度）	実践内容
前期 5月13日～8月26日	①スタート課題の目安や楽曲解説のWeb資料の掲載 ②練習チェックシート
後期 10月7日～1月27日	
5月20日・23日	③特別対面授業
前期 6月17日～8月19日	④オンラインレッスン ⑤録音・映像提出による双方向型授業
後期 10月14日～1月20日	

をもとに、ミーティングアプリ『Zoom』等を使用した非対面型遠隔授業（以下、オンラインレッスン）を行うこととした。また、6月より対面・非対面を併用して授業を行っていた本学の授業スケジュールの関係で、ピアノのオンラインレッスンの時間に学生が学内にいる場合や通学中であるなど、通話が不可能となる週は、学生が事前に担当教員にその旨を伝え、その週の課題曲を動画・録音で送ることとした。動画での課題提出に関しては、提出された映像に対して何らかのレスポンスをしなければ、双方向型は実現できず、教育の“質保証”という面では不十分である（深見ら2009）とある通り、学生が明確に自身の課題を把握し、事前事後学習に正しく取り組めるようにする必要があるため、送られてきた演奏を聴き、それに対して担当教員がそれぞれのケースに必要な形で返信する方法をとった。

Ⅲ. 各実践内容の詳細

1. Web 資料

1-1. 練習方法や楽曲解説の掲載

掲載した楽曲・テーマは主にピアノ未経験者やピアノ初心者^{注3)}がバイエル教則本を段階的に学ぶ上で重要と思われる新出の知識・技術を要する楽曲や今後の幼児曲習得に繋がる音楽的知識を含んだ楽曲である。初心者の増加傾向にはあるものの、学生の中には入学時点でブルグミュラー 25 の練習曲やソナチネからスタートするものもあり、そのような経験のある学生も参考にできるようにブルグミュラー 25 の練習曲から第2番「アラベスク」とF・クーラウのソナチネ op.55-1 第1楽章を楽曲解説に加えた。以下、上記の内容を考慮し選出した楽曲・テーマである。

- ①初心者のための練習・ポイント
- ②ピアノ演奏の基礎知識
- ③バイエル 29 番
- ④バイエル 52 番

- ⑤和音について～バイエル 46 番～59 番を用いて～
- ⑥バイエル 77 番
- ⑦バイエル 80 番
- ⑧バイエル 88 番
- ⑨付点のリズム～88 番～104 番を用いて～
- ⑩ブルグミュラー /25 の練習曲「アラベスク」
- ⑪クーラウ / ソナチネ op/55-1 第1楽章

1-2. 作成における留意点

作成に当たり他科目の Web 授業とのバランスをとり、譜例や図解を積極的に使用し、活字での指示をなるべく少なくすること、音楽用語を使用する際はこれまで音楽に触れてこなかった学生でも理解できるように一般的な言葉でもって説明することに留意した(例: ミ♯の説明時、ミの半音上→右隣の白鍵ファ)。また、スマートフォンを使用して閲覧する学生が多いことを考慮し、一つのスライドに情報を詰めこみすぎないようにした。

1-3. 各 Web 資料の内容

各資料の内容と学習目的について、一部を事例とともに示すこととする。

- ① 初心者のための練習ポイント：初心者が1からピアノを学ぶために音の読み方・指番号などの基本的知識の説明
- ② ピアノ演奏の基礎知識：基本事項を理解し、バイエル 12 番を演奏することを目的として作成
- ③ バイエル 29 番：タイが新出するため、スラーとの違いや拍子の数え方の理解をするために作成
- ④ バイエル 52 番：8 分の 6 拍子の説明と幼児曲に頻出する I-V¹-I の伴奏法を感覚的に習得することを目的に作成
- ⑤ 和音について～バイエル 46 番～59 番：バイエル 52 番の解説と重複する部分もあるが、和音についての基礎知識、アルベルティバス(資料1)や T-S-T(I

♪ 三和音を使った伴奏の形

お団子のような形をした三和音は分散させて
左手の伴奏形に使われます。
ということかと、



転じたもの
(順番を入れ
替えた) も
あります



基本的には ソシシ ですが、
音が入れ替わって シソシソと
一番下がシになっていますね。

下の例は ドミソ ではなくドソミソ になっていますが、
使われている音はドミソ ですよね。

資料 1：幼児曲に頻出する伴奏形について

♪ 46番

1小節ごとに覚えていきましょう
ドミソ (C) と ソシシ (G) だけ出てきます



Cはドソミソ
Gはシソレソ
という形に
なっています

このように楽譜を見た時、小節ごとの伴奏がどの和音で出来て
いるかを理解できると効率よく練習を進められます。

資料 2：バイエル 46 番を例に和音の種類とその伴奏形についての説明

♪ 両手を合わせよう！

下の写真は、右の () の
小節の弾き方で、右手が上
になるように交差させます。



赤い点線の音を合わせて弾きましょう。オレンジのカッコの部分、スムーズに移動
できるように練習しよう。(よく部分練習しよう)
リピート記号が付いていますが、繰り返しなしで演奏します。

資料 3：バイエル 80 番、腕の交差について写真を掲載。その他練習時のポイント等

- ーⅣ²ーⅠ)・七の和音の登場など幼児曲習得に必要な知識・技術が集約された重要な範囲として選出。和音の意味と基本的な和声進行における伴奏形の習得、理論の理解を目的とし、楽曲とともに説明(資料2)
- ⑥ バイエル 77 番:3 拍子におけるアルペルティバス、臨時記号の理解、及び、楽曲構成を分析し、効率的な練習方法を示す
- ⑦ バイエル 80 番:ブンチャッチャッ伴奏の弾き方と調号、左右交差・前打音など、新出の知識が多数あるため、写真とともに説明(資料3)
- ⑧ バイエル 88 番:付点を使用したリズムが新出するため、そのリズムを理解することを目的に作成
- ⑨ 付点のリズム～88 番～104 番を用いて～:88 番から 104 番までの楽曲を例に挙げ、様々な付点のリズムについて理解することを目的に作成

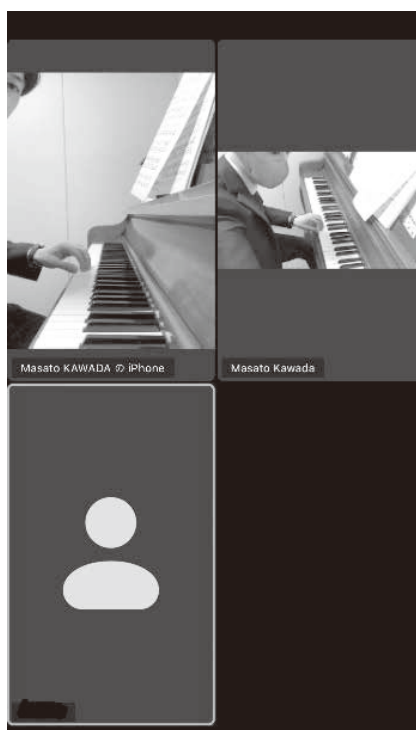


写真 1: オンラインレッスンの様子

※教員側の画面のみオンになっており、学生は2つの角度から手の位置、弾き方を確認できるようになっている

- ⑩ ブルグミュラー /25 の練習曲「アラベスク」:
更なる技術的音楽的向上を目的として、身体
の使い方と音楽表現の繋がりについて説明
- ⑪ クーラウ / ソナチネ op/55 - 1 第 1 楽章:
ブルグミュラーとともにピアノ経験の長い学
生に向けての推奨課題であり、音楽的表現
に繋がるテクニックやデューナーミク等につい
ての説明を中心に作成

2. 特別対面授業

対面・遠隔授業の併用が開始する 6 月 3 週
目より前に、「ピアノ演奏法Ⅰ」に限り特別に実
施させて頂いた特別対面授業においては各担当
教員と学生間の状況共有だけでなく、遠隔だけ
では補うことのできない、対面授業の様々な側
面が顕在化した。それらの事項はアンケートに
よる学生の所感とともに後述することにする。

3. インターネット通話による双方向型授業 (オンラインレッスン)

3-1. 実践方法とその傾向

ミーティングアプリ『Zoom』等を使用し、1
対1のオンラインレッスンを行った。通話アプリ
の使用に関しては、原則教員側のビデオ画面の
みをオンにすることで、学生のプライバシーを保
護するとともに、教員の手元が見られる等、対
面授業となるべく同等の情報を学生が得られる
ようにした。(写真1) 教員側のみのビデオ通話
によるオンラインレッスンでは、対面授業のよう
に直接学生の演奏を視覚的に確認しながら指導
できない。そのような状況においては、例えば
明確な練習不足による停滞ではなく、演奏に滞
りがみられる箇所について、その予測される原
因を教員からの「声かけ」により探りながら、
学生と問題点を共有して解決に導く方法や、対
面授業時に個々の学生の傾向を把握した上で、
その学生にとって注意すべきポイントを常に意
識させるようにする、といったことが必要である。

しかし、このオンラインレッスン特有のプロセ
スは今後の対面授業において学習効果をさらに

上げるための指導に繋がるとも考えられる。そのような「声かけ」によるオンラインレッスンの指導の実践例を次に示す。

3-2. 指導の実践例

「学生に考えさせる授業」への取り組みの意識はこれまでもあったが、筆者(川田)の中でピアノ演奏法における「考えさせる授業」とはどのような指導か、という疑問があった。バイエルの楽曲に頻出するA-B-A形式や反復するリズムモチーフなどにおいて、一回目に出てきた箇所だけを指導し、弾けるようにしてから、反復する箇所は事後学習として学生自身で形にさせるという方法はこれまでも積極的に取り入れられてきたが、これは楽曲構成の理解を促すものであり、ピアノ演奏における身体の有機的関連の理解とは異なる。今回の通話でのレッスンを通して、教員の「声かけ」から学生が自身の

演奏を観察し、その状況を教師に伝えるというプロセス(指導例・表2)が、自身の演奏法上の身体的問題をより明確に認識することになり、楽曲の理論的理解だけでなく、具体的な音楽表現の向上に繋がると考え、このような「声かけ」から生まれる新たな指導プロセスを今後の対面授業でも適宜取り入れ、演奏法における「考えさせる授業」として実践していきたい。

そして身体の使い方が単なる行為ではなく、音楽表現として具現化されているかどうかを教員側は目視による確認に頼らず、学生の演奏に更に注意深く耳を傾けながら授業を進める必要があると考える。

4. 録音・映像提出による双方向型授業

4-1. 実施に至る経緯

インターネット通話を利用したオンラインレッスンは学生が自宅から通話可能な時のみ利用する



譜例1：バイエル 80 番

表2：自己認識を深める「声かけ」による実践例

指導例：バイエル 80 番（譜例1）の演奏で左手首のポジションが下がる傾向にある学生		
学生	教員	ねらい
	左手小指を弾く時に指のどの辺りが鍵盤に当たっていますか？指の第1関節くらい？指の外側？指先？と質問する。	手首が下がる学生の問題は打鍵する際に指先ではなく深い部分でタッチしている、小指の場合、指の外側、でタッチしている。教員の方から「第1関節ですか？」など場所を具体的に挙げると答えやすい。
自分の演奏を観察して指の当たっている場所を答える。		問題点を言語化することで、演奏時に自分の手・指がどうなっているか理解する。
	そうです、〇〇で当たっていますね。指先でタッチしてみましょう。すると手の位置はどうになりましたか？	正しい弾き方で弾くとどのようになるか観察させる。
手の位置（手首）が上がりました。		どう変わったか確認し、言語化する。
	スタッカートで弾きやすくなります。幼児曲にもたくさん出てくる伴奏なので弾き方のポイントを覚えておきましょう。	目的が「手首を上げる行為」ではなく、どのような表現に繋がり、どこで使うのか、を伝えることで、学習意義を明確にする。

ため、個々の授業（レッスン）時間に他科目の対面授業のスケジュールの都合上、学内にいる場合や登下校中で学外にいる場合は行うことができない。また、自宅に Wifi 環境が無い等の理由で、ビデオ通話により通信量を著しく消耗してしまう、といった問題点があった。そこで個々の学生の環境や状況に対応できる双方向型授業のスタイルとして、学生がその週に練習した課題を録音・録画したものを提出し、それに対して担当教員が返信する、という方法をとった。原則として授業時間内に教員からの返信が行われるため、提出は授業日の午前までとした。また、通信量に制限のある学生はあらかじめ録音・録画した課題を Wifi 環境のある学校等で送信することで通信制限による問題の解決に努めた。録音・映像提出に関しても学生のプライバシー保護の観点から、録画に関しては“任意”とした。

4-2. 指導の実践例

学生が提出した課題に対して、各担当教員が返信する方法で双方向型授業としたが、その返信方法には学生の状況に応じて、いくつかのバリエーションが存在する。

- ①学生はピアノの前にいることは出来ないが、

指定時間に通話（ビデオ通話も含む）し、教員が提出された演奏について修正箇所や練習方法などを伝え、学生はそれらの事項を楽譜に書きこんだり、メモをするなどして事前事後学習に取り組む。

- ②課題の修正箇所等について、コミュニケーションアプリ^{注4)}にメモを残し、質問に答えるなどやりとりをする。

- ③教員が返信用ビデオを撮影、作成して学生に返信する

方法1：タブレット端末の画面録画を使用して、楽譜に注釈を加えながら部分演奏とともに解説していく。（写真2）

方法2：練習方法等について教員がレッスン動画を作成し、返信する。（写真3）



写真3：動画返信による方法2



写真2：動画返信による方法1

IV. 研究方法

1. 調査対象者

前期終了時、「ピアノ演奏法Ⅰ」を受講した本学1年生72名を対象に「ピアノ演奏法のWeb授業に関するアンケート」を実施した。回答は69名であった。

2. 調査内容と方法

調査の内容は、以下の通りである。

- ①楽曲解説等のWeb資料は課題を練習する上で役に立ったか
- ②特別対面授業についての感想
- ③通話による双方向型オンラインレッスンは授業として満足できたか
- ④動画・録音を使用したレッスンは授業として満足できたか

アンケート調査は、学生の率直な意見を聴取しなかったため無記名で行った。但し、回答内容とそれぞれの学生の経験値を照らし合わせることで、Web資料及びオンライン授業の回答を習熟度別に調査しなかったため、学生には授業開始スタート時の進度を①バイエル60番より前 ②バイエル60番以降 ③ブルグミュラー ④ソナチネ・その他の4つから選択してアンケートに協力してもらった。

なお、本研究は令和2年度佐野日本大学短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て進められた（承認番号第20-08号）。

V. 各指導方法の学生アンケート結果とその効果

前期終了時に実施した学生アンケート結果・所感から各授業形式の満足度とその効果を分析した。また、回答数に（ ）で示す数字は、スタート課題曲が①バイエル60番より前、②バイエル60番以降、を選択してアンケートに答えた学生、つまりバイエルからスタートした学生の数である。

1. 練習のポイントや楽曲解説（Web資料）

1-1. アンケート結果とその分析（表3）

練習ポイントや楽曲解説等のWeb資料についての学生アンケートは表3の結果となった。所感を見ていくと、「①非常に役に立った」「②役に立った」と回答した学生の中には「わからない箇所を確認して理解できた」「その曲のポイントや#などの弾き方がわかった」「右も左もわからなかったの、基礎が分かるのがありがたかった」などの所感もあり、練習時のポイントや新出の用語・その奏法の理解について学生自身が一定の効果を実感しているという結果を得ることが出来た。①②を選択した学生の進度に関してみると「①非常に役に立った」を選択した半分の学生はスタート時点でブルグミュラー以上の進度の学生であり、予備知識やある程度の経験がある学生にとって、効率的な練習をするためのポイントや難しいであろう箇所の解決法を予め示すような資料は非常に使い勝手が良かったと考えられる。

一方でWeb資料のほとんどがバイエルからスタートする初心者や経験の浅い学生の学習をサポートする狙いがあるにもかかわらず、バイエルからスタートした学生のうち約45%が「③普通」または「⑤使用しなかった」を選択したことから、これらの原因究明と資料内容の改善が今後のWeb資料等のオンデマンド発信を授業にさらに効果的に組み込むために必要不可欠である。「③普通」を選択した学生の主な所感は「基本的なことが書いてあってよかったが、直接教えて頂ける方が良かった」というような対面授業と比較した感想と、「見づらい部分もあった」「見ても（読んでも）理解できないところがあった」という、内容に対するもので、図解や活字による説明のみのWeb資料では、模範演奏等を参考に動作を模倣して楽曲を再現するという方法を取る

ことが出来ず、資料からの情報のみでの学習に限界を感じていたようだ。はじめに挙げた対面授業と比較した所感については、非対面授業期間の間 Web 資料から得た情報のみで楽曲の理解に努めたものの、演奏に対する教員からのレスポンスを得られないことから、自分の演奏が正しいかどうか分からないという状況に置かれていたと考えられる。続いて「⑤使用しなかった」を選択した学生の所感は、「そもそもバイエルが何かわかっていなかった」「バイエルを見て弾いておらず、Web 自体も開かなかった」という、シラバス及び Web 上の連絡事項で明確に提示していた使用教科書や授業の進め方を理解できていなかったケースである。他の所感としては「小さくて見るのが大変だったから」「見ても良くわからなかったから」という Web 資料の形や内容が原因で理解するに至らず、初期段階で使用を諦めたもの、「外でピアノを習っていたため」という代替学習に頼ることで必要性を感じていなかったものがあった。外部でのピアノレッスンなど直接指導が受けられる環境にあったことは本来望ましいことではあるが、作成した資料は所謂ピアノレッスンで習う楽曲再現のみを目的にしたものではなく、保育者としての実用的な表現技術として必要な知識・技術の習得を目的とした内容（主要コードの移りかわりが幼児曲でどのよう

に使われているか、など）になっており、外部でのピアノレッスンと併用することでより大きな学習効果が得られたのではないかと考えると残念である。⑤を選択した者のなかで進度がバイエルスタートではない 2 名の学生は、ピアノの経験が豊富でソナタやその他の単一楽曲を演奏していて Web 資料の内容に該当しなかったため使用しなかったと回答している。

1-2. Web 資料による遠隔授業の改善点

一定数の学生から学習効果を実感できたという回答を得ることが出来たが、同時に Web 資料の配信という非双方向型授業の限界と配信内容の改善点が見えてきた。

対面授業では学生が練習してきたものに対して、その場で助言・修正し、時には担当教員の実演による練習法の提示、質問にも答えることが出来るため、学生は演奏の問題点を明確に把握し、今後どのような練習をすればよいかを視覚・聴覚情報をもとに知ることが出来る。その場での助言・修正はそもそも非双方向型授業である Web 資料における学習の手の届かない部分である。しかし、Web 配信をする内容に関しては、視覚・聴覚情報を取り入れ、具体的なイメージに結びつけ易くすることで、感覚的理解を先行させ、段階的に Web 資料の狙いである論理的理解に繋げていけるようなものに

表 3：前期 Web 資料による授業の学生アンケート結果

回答	回答数 (バイエルから始めた学生)	割合 (%)
①非常に役に立った	8 (4)	11.6
②役に立った	29 (27)	42.0
③普通	20 (17)	29.0
④役に立たなかった	0	0
⑤使用しなかった	11 (9)	15.9
未回答	1	1.4
合計	69	100

改良するべきである。また、聴覚情報があることで、練習したものが正しいかどうかを確かめられることも学生の学習促進に繋がるだろう。

2. 特別対面授業

5月20・23日に行った特別対面授業は本授業の本来の形式である1対1の対面授業であるが、対面授業の重要性や非対面授業では手の届かない部分を可視化することを目的として、アンケート結果と学生の所感等を分析する。

2-1. アンケート結果とその分析（表4）

91.3%とほとんどの学生が「①非常に良かった」「②良かった」回答した。授業の内容に関しては、「自身の課題が明確になり安心した」「Webだけでは分からなかった所を直接教えて頂いて良かった」という声が多く、レスポンスのないWeb資料のみによる学習に不安をかかえていた学生にとって、担当教員からの直接指導はそれまでの学習効果の確認や新たな問題点の発見、学習法の軌道修正ができたことから、安心して更なる学習へ取り組むことができたと考えられる。

また、特別対面授業実施までのWeb資料による授業期間において、学生とそれぞれの担当教員間で直接コミュニケーションをとることが出来なかったため、対面授業に

よって、各学生の傾向や性格等の把握に繋がった。

さらに他の質問への回答と各学生の初期進度別にみると、バイエルスタートの学生で且つ『Web資料による授業について』のアンケートで「③普通」「④役に立たなかった」「⑤使用しなかった」、と回答していた学生26名の中から、特別対面授業に対し「①非常に良かった」「②良かった」と回答した学生は、20名で、その所感内容は「Web資料だけでは分からなかった部分を理解できて安心した」という相互補完に関するものや、「不安だったが、丁寧に教えて頂き、安心した」という精神的な安定感を得たという内容のものが主であった。

もともとWeb資料に満足と回答していた学生の中にも、「初回の授業が出来て安心した」という内容の回答が多く、遠隔ではそれぞれの学生の性格に合わせた助言はできないため、こうしたメンタル面のケアは対面レッスンにゆだねるしかない（深見2009）というように、直接指導での各学生の性格や傾向にあわせたアプローチによって、学生の学習内容の充実やメンタルケアという面で大きな効果をもたらすことを再認識することとなった。

3. オンラインレッスン

3-1. アンケート結果とその分析（表5）

表4：特別対面授業の学生アンケート結果

回答	回答数(バイエルから始めた学生)	割合 (%)
①非常に良かった	37 (29)	53.6
②良かった	26 (23)	37.7
③普通	6 (6)	8.7
④必要ない	0	0
合計	69	100

学生へのアンケートにおける「Zoom等を使用したインターネット通話でのオンラインレッスンに満足したか」という質問に対して次のような結果となった。68.1%の学生が「①非常に満足」「②満足した」と回答しており、その理由として「質問もでき、通常の対面と変わらずレッスンを受けられた」という対面授業とほぼ変わらないと感じたものが最も多く、質問してその場で疑問を解消できることも学生の満足度に繋がったと考えられる。次に多かった所感として「家で（遠隔）でレッスンを受けられるのは安心した（良かった）」で、コロナ禍での感染対策としての観点から、安心して授業が受けられたことを評価したものだ。次に「③普通」と答えた学生の所感からインターネット通話におけるオンラインレッスンの問題点を分析する。オンラインレッスンに関しては、学生が指定のレッスン時間に学内にいる場合や、帰宅途中である場合などは受けることが出来ない。その為、中には遠方から通学していて授業時間にピアノの前にいることが出来ず、ほとんどオンラインレッスンを受けられなかった学生もいた。そういった状況にあった学生3名が「あまり受けられなかった」という理由で「③普通」と回答していたが、オンラインレッスンを受けられない時の対処として録音・映像提出による授業を行っており、それら3名のうち2名は録音・映像提出での授業について「②満足」と回答して

いることから、授業としての満足度は得られた。「④物足りない」を選択した学生のうち1名は通信障害によりたびたび通話で不自由を被ったことを理由として挙げており、オンラインレッスン中に通信上の問題が発生した場合は、録音・映像提出による授業に切り替えるなど、柔軟な対応が授業の質保証をする上で大切である。

3-2. オンラインレッスンの改善点

授業の内容についてのコメントで上位を占めたのが「手元が移せないで指使いが不安だった」「わかりづらい時があった・言葉だけでは分からないこともあった」となっており、教員側のビデオ画面を通しての運指やその他事項についての指導法が確立していなかったため、学生の理解に相違が生まれてしまったものとする。通話レッスンにおいて、学生のプライバシー保護の観点から、学生側の画面をオンにするかどうかは学生の意思に依存しており、教員側から学生の手が目視できないという状況はどうしても生まれてしまうため、Ⅲ.各実践内容の詳細で示した、オンラインレッスンにおける指導の実践例にある、教員側から学生の陥りやすい弾き方の諸問題について「声かけ」し、学生に確認させることで問題を明確化し解決していく方法等を基盤として、オンラインレッスンの指導法を模索する。

表5：『Zoom』等を使用した双方向型オンラインレッスンの学生アンケート結果

回答	回答数（バイエルから始めた学生）	割合（％）
①非常に満足	18（14）	26.1
②満足	29（26）	42
③普通	20（17）	29
④物足りない	2（1）	2.9
合計	69	100

4. 録音・映像提出による双方向型授業

4-1. アンケート結果とその分析（表6）

全体として①②を選択した学生が65%以上と多く、「①非常に満足」を選択した学生に関してはインターネット通話によるオンラインレッスンよりも4.3ポイント多かった。「①非常に満足」「②満足」を選択した学生の所感で多かったのは「アドバイスの確だった」というものが12名で、その中でも解説動画によるアドバイスが良かったというものが10名と殆どを占め、個々の進度に合わせた新曲解説や現在取り組んでいる課題の改善点などを動画にした解説が分かりやすく、満足度の高い授業となっていた。また、2番目に多かった「動画・コメントを後で見返せるのが良い」という所感にもあるように、送られてきたコメントや動画を保存して何度も見返すことで、一度の助言だけでは修正が難しい箇所や、新曲課題の練習において注意するポイントを何度も確認しながら進めていくことができるこの授業形態が幅広い学生からの支持を得た要因として考えられる。

この結果の分析から、教員によるレスポンス方法のうち、Ⅲ.各実践内容の詳細、4-2で示した【③教員のビデオ返信による方法】が学生の学習効果、満足度ともに高いことが分かった。

全体的に評価の高い結果となった録音・映

像提出による双方向型授業だが「動画を撮るときに間違えずに弾くため、何度も撮り直した」という所感もあり、練習になると同時に時間的な負担を感じていた学生もいた。

4-2. 録音・映像提出による双方向型授業の改善点

学生の映像提出に対して行うレスポンス方法として3つのパターンがあったが、学生所感の分析から、解説動画による返信方法が最も効果的であると考え、個々の学生に対応した解説動画による授業の2つの方法について、それぞれの改善点を検討する。

方法1の楽譜に注釈を加えながら進めていく動画は、常に楽譜の理解とともに学ぶことができ、近年の学生に多い手の動きや指番号のみで覚えて弾いてしまう練習法の改善や楽譜を読むという、今後保育者として様々な楽曲を習得していくための基盤づくりに繋がるだろう。

しかしこの方法は教員の手の使い方やポジションなどが視覚的に確認できないため、学生の理解度によっては、学習の進度に差が出てしまう。その短所を補う形が自撮り形式の方法2である。この方法では学生は常に教員の演奏動作を見ながら学習することができる。指導する際の配慮として教員は楽曲を通して弾いたりせず、部分的な模範演奏や片手奏程度に留めるようにする。これは前述にも

表6：録音・映像提出による双方向型授業の学生アンケート結果

回答	回答数（バイエルから始めた学生）	割合（％）
①非常に満足した	21（20）	30.4
②満足した	24（19）	34.8
③普通	17（15）	24.6
④物足りない	3（2）	4.3
⑤受けなかった	4（2）	5.8
合計	69	100

ある通り、近年の学生に多い、楽譜を理解せずに、教員の演奏を模倣して覚えて弾いてしまうことを防ぐためである。

これらの解説動画の返信による双方向型授業はそれぞれの方法で補うことのできない部分を含んでいるが、アンケートの結果から多くの学生がこの学習方法に手ごたえを感じたことは明らかであり、それぞれの学生に合った解説動画を教員が判断し、速やかに返信することが最も大切である。

この実践経験から、個々の学生の演奏に対応した双方向型授業ではないが、動画内で学生が楽譜を見ながら、譜面上のポイントを細かく把握し、且つ教員の演奏動作を見ることができる解説動画を予め作成し、事前事後学習に利用する方法として、次節のⅥ実践結果の総括と新たな取り組みの中で、その具体例を示すこととする。

また、「動画を撮るときに間違えずに弾くため、何度も撮り直した」という所感について、これは学生のより良いものを提出しようという気持ちの表れではあるが、実習園において実習生に求められる資質・能力を調査した栗原、大塚による研究によれば、簡易伴奏でも止まらずに失敗しても続けて弾く事が求められていた（栗原、大塚 2020）⁵⁾とあり、録音・動画の提出においては、正しい練習を行い、楽曲を演奏できるようになったら、小さなミスに動揺せず、正しいリズムや一定のテンポを保ち、止まらずに最後まで弾くように指導することにする。

Ⅵ. 実践結果の総括と新たな取り組み

1. 実践結果の総括

本学の「ピアノ演奏法Ⅰ」では、Web 資料作成やオンラインレッスン、録音・映像提出による双方向型授業等、様々なインターネットを使用したピアノ学習法に取り組んだ。それぞれの授業形式において、学生が感じた学習効果や授業の満足度から今後の

授業内容の充実に繋がる取り組みを抽出し、ブラッシュアップしていくこととした。動画配信サイト等で抑えるべき鍵盤の位置やリズムを容易に見たり聴いたりすることができる現在の学生を取り巻く環境において、学生自身が考えて理解するという授業構成はとても重要である。

そこで、Ⅲの各実践内容の詳細 3-3 で示したように、学生に考えさせる部分として、演奏上の身体の使い方、自分が今どのように弾いているか、なぜ弾きにくいのか等について自分で観察し、考えることがピアノ指導における「考えさせる授業」の在り方の一つである。また Web 配信による楽曲解説は「ピアノ演奏法Ⅱ」でも継続して行うこととし、その内容については、前期に作成した Web 資料の文字による解説に学生の理解の限界を感じたことから、録音・映像提出授業時に行った動画返信の方法を参考に動画形式での楽曲解説を作成した。

2. 実践方法の具体例

楽曲の動画作成においては、学生が楽譜を理解しながら学習できること、様々な理解度や能力の学生にとって効果のある視覚的情報を含むことを考慮して刷新した。ここではバイエル 96 番の解説動画を例にその概要を示す。

まずは、楽曲の構成を分析し、基本的事項や効率的な練習のポイントとなる部分を確認する。（写真 4）

セクションごとに部分演奏を含めつつ説明していき、モチーフの繰り返しなどは基本的に演奏せず、ポイントになる部分のみを示すこととする。（写真 5）

これらの取り組みには、適切且つ効果的に授業に取り入れられるよう、解説動画を進めるタイミングについて各教員の共通認識のもと学生指導にあたる必要があると考える。

拍子

8分の3拍子

♪ = ♩ ♩

曲の構成

||

A-B-A

写真4：楽譜を見ながら基本的事項の確認

A

ポイントまとめ

- ①3拍子の伴奏について
- ②右手・左手の入れ替わり
- ③スラーを意識した演奏
～ニュアンスを理解する～
- ④16分音符の連続は運指を
しっかり守る

写真5：教員による譜例提示での説明

VII. まとめと今後の展望

本稿では、今回余儀なくされた web 授業における学習環境で、保育士養成課程で学ぶ学生の幅広いレベルに対応できるよう、楽曲解説資料や解説動画の配信、オンラインレッスンの実践結果を学生の評価で分析し、今後の授業内容といくつかの指導法が示唆できたと考える。これまでも効果的な指導法を探ってきたが、このコロナ禍における Web 授業によって本学が提示した楽曲解説やオンライン配信について、この局面で研鑽できたことは我々教員にとって今後の指導法を見出す大きなきっかけとなった。

今後も、授業で併用できる事前事後学習での動画配信を増やしていくこと、特に初心者については、これまで以上に入学時でのピアノに対する不安や技術の底上げを目指すため、充実した入学前教育の動画配信の導入も検討し、入学時のレベルの分析や検証をしていきたいと考える。

更に、幅広いレベルの学生に対応できる指導法の確立と限られた期間で充実したカリキュラムを検討していきたいと考える。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました学生、ご助言をいただいたピアノ指導にあたる担当の先生方には、心より御礼申し上げます。

注記

注 1) 本学 1 年次の前期科目「ピアノ演奏法Ⅰ」と後期科目「ピアノ演奏法Ⅱ」は保育士養成課程の選択必修科目である。

注 2) 本学の Web 授業を掲載するサイトである。

注 3) ピアノ未経験者は一度もピアノのレッスンをしたことがない者であり、ピアノ初心者とは、少しでもレッスン経験がある、または習い始めている者をいう。

注 4) 学生に広く浸透していて、且つ使用することに抵抗感が少ない「Line」も可能とした。

引用・参考文献

- 1) 今泉朋美 (2004) ピアノ初心者学生の為のピアノ授業の試み：集団講義とキーボード、ピアノを用いて② 日本保育学会大会発表論文集 (57) pp.560 - 561
- 2) 多田純一・山下玲子・他 (2019) 奈良佐保短期大学における音楽教育関連科目のカリキュラムに関する一考察 奈良佐保短期大学研究紀要 第 26 号・第 27 号
- 3) 深見由紀子・中平勝子・赤羽美希 (2009) ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面授業の効果と課題 京都女子大学発達教育学部紀要 第 05 号
- 4) 中平勝子・赤羽美希・深見由紀子 (2012) ピアノ弾き歌い教育の質保証 日本教育工学論文誌 36 (3) pp.291 - 299
- 5) 栗原多恵・大塚登 (2020) 実習を受け入れている保育現場が望む実習生とは 佐野日本大学短期大学紀要 第 31 号 pp.3 - 5

